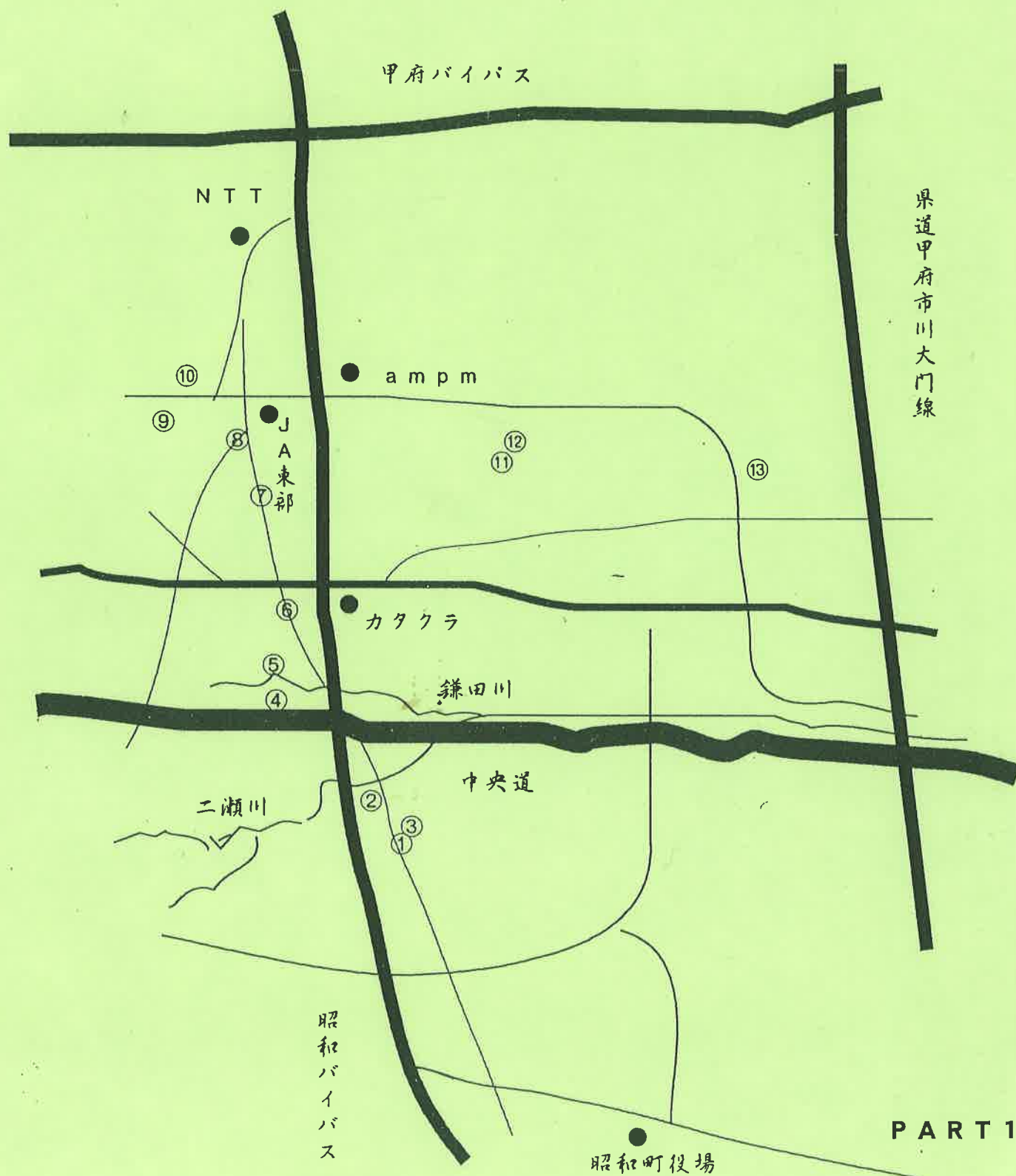
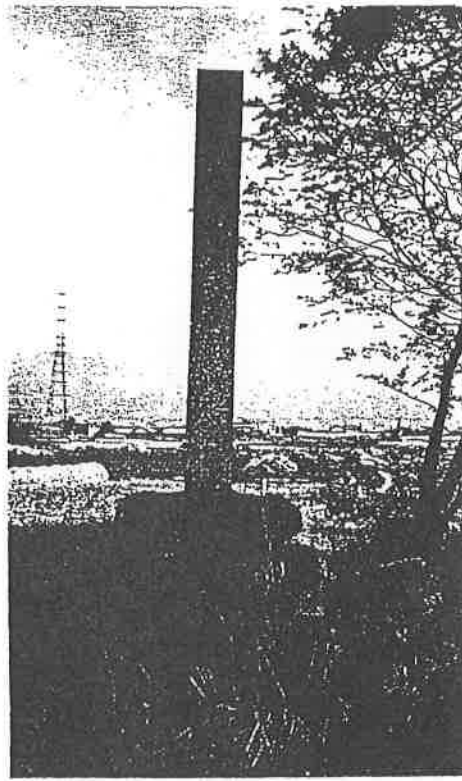


タイムスリップ路



1 螢 合 戦



源氏ホタル発生地碑

螢合戦の話をしよう。これこそは人々が人間の生命の前に納得づくで絶滅に追い込んだのだったが、あの昆虫こそ往時の昭和の風物詩として惜しまれてならないし、泣いて殺さざるを得なかった人々は異様な心理からふり返っているのだろうと思う。そして再び螢をふる里への声も努力も試みられている。

昔から蛙やトンボや蜩しじみなどと同じで、螢も六月初めになると村の田畑や川や草むらのいたる所に螢が発生して光り舞うのがあたりまえだと人々は思っていた。その螢が天然記念物として文部省から指定され

るようになったり、螢合戦が行われるようになったのは昭和五年前後からである。

明治維新により京都から東京へ遷都され、大正天皇が亡くなられたのは、明治天皇について東京では二人目である。明治天皇の長い在位下りまちと、維新以来の国力の内外にみる大発展と文明開化のしるしは忽ちにして天皇崩御を慕う如く代々木に明治神宮を具現し神として崇めた。大正天皇は在位も短く、病身の故もあってか、現在東日本に一つある多摩御陵として祀られている。昭和四年、多摩御陵が完成し東都第一の御陵となった時、時の押原連合青年団長保坂義貞氏等によって、この多摩御陵に螢を献上し、大正天皇のみ霊を慰めようとして宮内庁の許可を得て、螢を提げて参拝し、御陵の夜に光り舞わせるべく放したのであった。

それらもよいきっかけとなって、翌昭和五年鎌田川の螢は天然記念物として指定をうけ、現在螢の小公園に建てられている記念碑となった。

役場も力を入れ、青年団へ二十円の補助金を出して螢合戦はこうして始められた。西条と押越で始められ、やがて山伏川から常永駅西で今川となる中島と上河東でもやるようになった。その頃はちょうど田植え前の田に水が入り、蛙の声がやかましかった。麦も刈り入れなければならぬし、蚕も盛食期で人間は蚕に家を占領されて片隅に寝たりの農繁期で、たださえ忙しく、日の長い一日を暗いから暗いへ働かねばならぬ時季だったが、青年達はまわりの町や村の人達が大勢来てくれる事が嬉しくて、夕食が済むと鎌田川や今川へ駆けつけて、雪洞



ほたるみばし

にローソクの灯を入れ、小屋がけをした舞台上で踊りや歌や手品やらを演じた。マイクロホンもなくせいぜい手廻しの蓄音機ぐらいだった。

もえつきたローソクの交換にも回った。押越の県道から真孤や葦が背

丈ほどもある川端の暗がりを入る。押越は県道わき

で、西条は現在の螢見橋の所で演芸をやったのでそこが人の溜り場と

なった。常永は駅前の広場だった。たいてい二晩ずつ行われた。戦時

の中断はあったものゝ昭和三十年過ぎまで行われたが、戦後は宮入貝

撲滅のため螢が減りつづけ、螢を集めてきて沿道の川に放したりした

が、遂にやめる他なかったし、昭和五十一年指定も解除された。

農繁期のたださえやせる忙しさの中で、青年は螢合戦をやり、大人

達がこれに理解を示した。それらの心情をこゝで考えてみたい。

まわりの町や村から大勢見に来てくれるのが嬉しくて、と先程も書

いたが、全く単純に、それだけで村も青年も螢合戦に入れあげたのだ。

最近では観光行政で町の過疎化を防いだり、観光振興で町を発展させようとしている町村が多いが、そんな考えはみじんもなかった。初

夏の宵を人々が螢を見してくれるだけでは地元になんのメリットがある

筈もない。ただ螢を村のシンボルとしたかっただけである。螢の名所

鎌田川を名所にしたかったのだ。

山梨日日新聞社で県内鉄道沿線の車窓十景の人気投票をした時も、

青年も村も挙って力を入れ、十景への入選を果たした。かくて螢合戦

は村のシンボルばかりでなく、祭ともなって、人々は忙しくともその

季節が近づくとウキウキと夜祭りを待つ人の心になれるのだった。

もうかる程ではなかったかと思うのだが、当時民営の身延線もバス

会社も螢見物の臨時を出して人気をおおった。奉仕に働いたのは青年

だけではなく、後に議長となった磯部孔一郎氏は建具職の技術を生か

して雪洞づくりの労力奉仕をしたり、商店は名を入れる代わりに雪洞

を寄付したりした。

宵闇のせまる頃となれば、いたる所の草むらに螢が光りはじめ、夢

あかりの明滅は次第に草むらや川面の上の空にも広がり、美しい田園

の詩情は夕風のやむ九―十時頃がもっともたくさんの螢が舞い、光の

尾を曳く。流れ星でもない、ネオンサインでもない、生きた昆虫は無

限の多彩の曲線、直線を描いて、しかも長く短くと、強く弱くと光の

線や尾を引く。螢にとってはお互いに求め合う交尾のための信号なの

だが、それを眺める人間にとってはどんなに考えても真似のできない

自然の魅力だし、今でもありくとうかぶノスタルジアである。

昭和六年五月九日夜、押原小学校講堂で例の「鎌田小唄」の発表披

露と練習会が行われた。当時湯田女学校に勤めておられた二区の五味義尚氏の斡旋で同校の米倉寿仁氏（シュウル派の画家で、詩人でもあった）、竹田氏が作詞、作曲したものを、押原小学校に在職した斉藤先生が指揮して行われた。米倉氏達も来村され、男女青年に交じって踊り、その振り付けも作詞も作曲も高踏的で、しかも単純で情感的にもピッタリで、忽ち村民の間に新民謡、新民踊として広まり、螢合戦には演芸の中心となって行った。

鎌田ひとすじ 流れにそうて

ボツと闇夜に ボツと闇夜に夢あかり

歌詞は三番までしかないが、今でもその頃歌い踊った人達が勢いある。螢が町のシンボルとして復活したら、またこの唄も歌われ出されずにはまい。

流れ星よりも、ネオンよりも先程ものべた。そんな美しい自然がふたたび現在の発展する町に戻ってきたら——これは螢を知る人も知らぬ人もさらにわが町のよさを思い知ることだろう。いるのが、発生するのがあたり前のわが町だったのだ。きっとそうなるだろう。いや、そうさせずにはおくまい。そして螢が光る里は自然も水も豊かに取り戻さなければ実現しない。近代人類の指標である環境を、自然を保護する点にも一致する。

螢のことを少し長く書いた。が螢発生地の小公園付近といい、常永駅付近といいどちらもみのぶ路に沿った失われた風景である。そしてまた復活してほしい夢のイベントでもある。

2 五 本 杉

「五本杉」という地名は、旧正法寺の草庵に五本杉が植えられていることに由来するのである。

当主長谷川勝氏（西条一一六番地）の遠祖は、長谷川与兵衛（当主長谷川明夫氏の遠祖）の別家としての長谷川与平次である。長谷川勝氏宅は昭和二十七年六月失火により全焼したので何も資料がなく、先祖のことは寺の過去帳による外はない。妙源寺の過去帳によると与兵衛第別家、長谷川与平次とあるから、長谷川家の分家であることに間違いはない。与平次が五本杉という地名に新宅を建てたので家号を五本杉というようになったのである。

過去帳を見ると、戒名に天保の年号などがあるので相当の旧家であり、名門でもあった。みのぶ道に密着していた家で、しかも野中の一

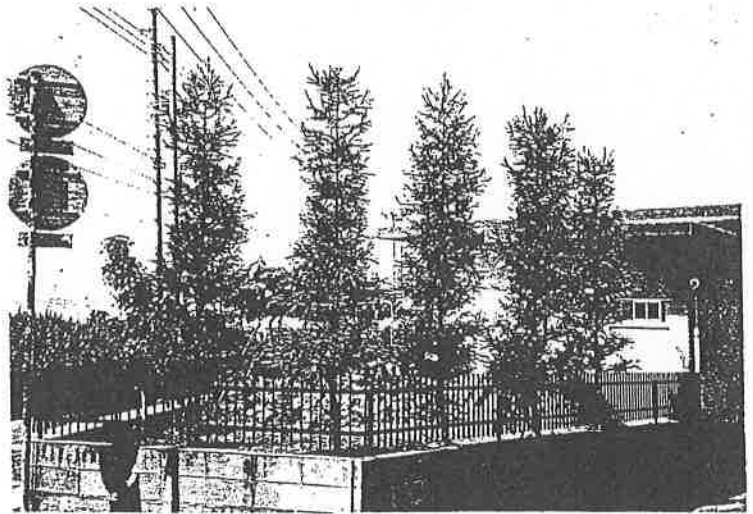


軒家だったので道行く人々の目じるしにもなっていて、五本杉という愛称で界隈の人々から親しまれていた。

雪の日など、下駄に雪が挟まって困った時には五本杉の下壁に黒板が張ってあったので、それに下駄を打ちつけて雪を払ったりしたのである。

現在、家々は明治、大正に建てられたもので、五本杉も元は螢見橋の根本にあったのが、昭和バイパスの開通によって源氏ボタル公園の隣接地に移転したのである。

現当主勝氏の五代前にも五杉という方があった。曲碁の名人で、安政三年草鞋履きで上京し「三きた」の許を得たということである。その祝賀の書き物を見ると、門人百数十名の名が列挙され、発起人も当時の土地の有名人が名を列ねている。この書き物だけ本家の土蔵にあったので、前記の火災の難をのがれ五本杉の唯一の遺物として残り今も横額として飾られている。



現在の五本杉

五杉は墓に対する興味と自信が深く、基石が基盤の形をした下石の上に建てられていて珍しい墓石である。

戒名も、観螢院五杉日翁信士、と刻まれている。

墓所に行ってみると、興味をそえられるのは、螢の字が戒名の二つの中にあることである。

観螢院五杉日翁信士

観量院法螢日情信士

これによって、五本杉付近に昔はいかに螢が舞っていたかがわかる。五本杉の方々がいかに螢に愛着を抱いていたかもわかるのである。

3 大嶽山の石塔

寿楽川が西条前切と下切とに分かれるところが川幅が広がったのでその中央に大嶽山の石塔が建てられていた。

これは三富村上釜口の「那賀都神社」を分祀したもので大変大きいものである。

台石は石垣の正方形で、底辺一メートル八十センチ、上辺一メートル四十センチ、高さ九十五センチ、その上にまだ台石が四段あり、その上が火袋になっておりその上に笠が載っている。笠も正方形で一辺が一メートル十四センチ、全体の高さは三メートル十八センチの大きなものである。

台石の四段目の正面に「大嶽山」の字が刻まれ、三段目左側に発願人として野呂瀬源右衛門、名登利松右エ門、野呂瀬茂エ門、野呂瀬彦右エ門、野呂瀬仁右エ門、野呂瀬玄琳と当時超一流の名門六名の芳名が記されている。左側に世話人として塚原久衛門、堀内才助、深川傳四郎の三氏が記され、その一段下の右と裏に二十一名の講の芳名が記されている。

建立は元治改元甲子歳六月であるから、百二十四年前に建てられたものである。百二十四年前にあの大きいものを建てた人々の大嶽信仰の深さに敬慕の念を禁じ得ないのである。

当時の人々は信仰心が深く、お伊勢講、大嶽講、秋葉講、三峯講等各種の講をたて、お伊勢講などは、富士川を舟で下り、東海道を草鞋掛けて歩いて伊勢まで行ったものであり、三峯講などは、塩山から三富村に入り、秩父山系の山々を越えて秩父の三峯神社に参詣したのである。

講の人数は大体十名位、多くて二十名位で、毎年講中の者から二名の者が代参として神社に参詣し、御神符、お饌米、お守り、お箸等を戴いて持ち帰り、当家といつて当番の家に講員全部の者が集つていて杉の葉で作った小さな飯宮に納め、その前でご神酒を戴きあとは家の中に入つてたくさんのご馳走を食べて飲を尽すのである。

那賀都神社のご祭神のお一方は大山祇命で、本社は愛媛県越智郡大三島宮浦村神山にあつて、国幣大社であつた。大山祇命のご神徳の一つに海上守護神がある。西条の大嶽講の方々が海上守護神であつたことが脳裡にあつたので、大嶽山を水難防止のため川の中に建立した事

に対し深い感銘を覚えるのである。

しかも、火袋の空間は燈明が点せるようになっていて夜は燈明をつけて旅人に道案内をする標識になっていたのは、その心根の美しさに敬虔の念を抱くものである。

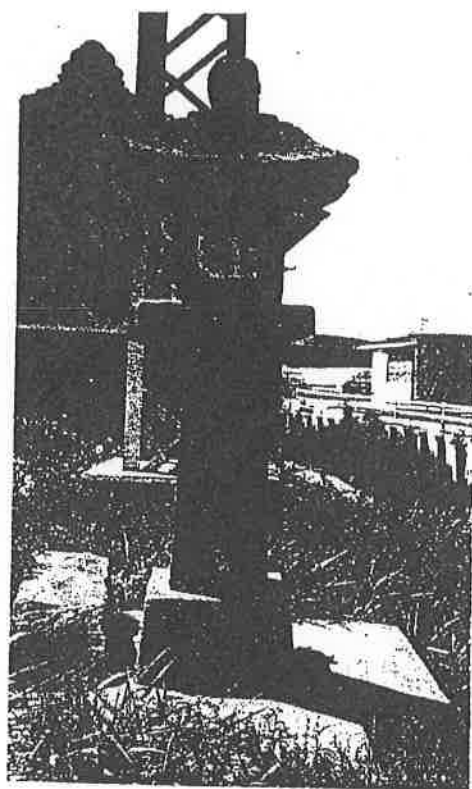
元の位置は道路拡幅のため鎮座することができず、長谷川明夫氏宅に入る道の左側の川沿いに移され、そこも道路拡幅のためついに現在地に移されたので、西条の大嶽山は三ヶ所ともに水に縁のあるところで大嶽山と水との宿縁を感じるのである。



大 嶽 山

4 秋葉講の燈籠

西条下切の鎌田川橋の南橋詰に、秋葉さんの燈籠が建っていた。下切の秋葉講の人々が建てたものである。村人はこの燈籠を秋葉さんと呼んでいる。鎌田川の改修のため今は小宮山卓良氏の元の屋敷に移さ



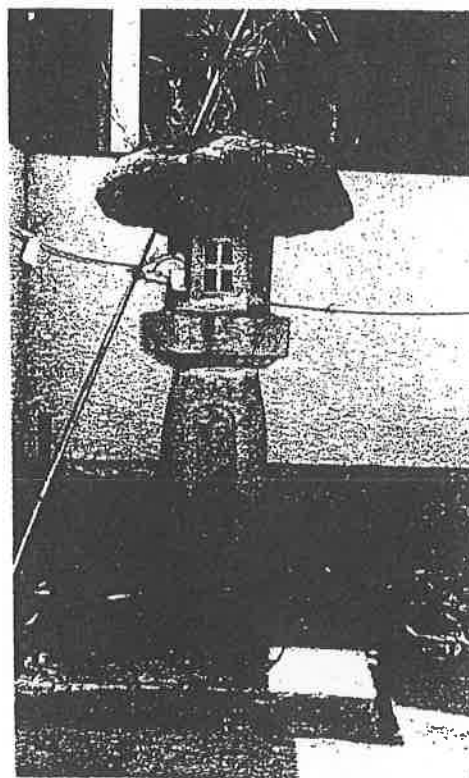
秋 葉 さ ん

れている。

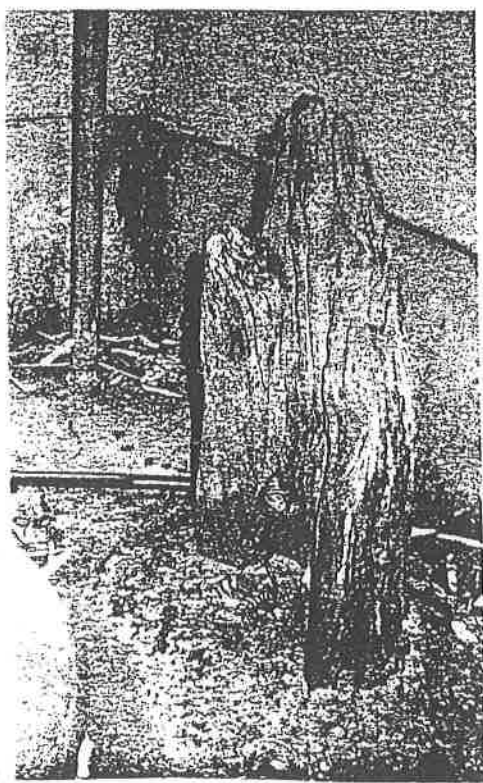
燈籠には何の文字も刻まれていない。ただ裏面に、昭和五十六年二月吉日再建とだけ刻まれている。小さいもので仰々しく秋葉の字を刻むのは心苦しく思い何の字も入れずただ自分達だけで心ひそかに静岡県秋葉山上の秋葉神社を偲ぶよすがとしようと思つたものだと思測されるが、そのゆかしさが偲ばれて心うれしく思われる。

5 楠 さん

いつの頃か（江戸時代だったと想像される。）、鎌田川に大木が流れ



楠 地 蔵 尊



楠 さ ん 原 神

て来た。大洪水のために川が増水して流れてきたものである。村人が
すくい上げてみると

その大木はよい「香
り」を放っていた。

村人は、これはただ
の木ではない、ご神
木に違いないと思っ

た。日本民族には古

来から、山、大木、

雷、水というように

摩訶不思議なものに

は神霊が宿っている

と思い、これらを神

として祀る原始的信

仰があった。下切の人々はこれは神木だと思い、この大木を一丈位に

切断して現在地に建て神として祭り、「楠さん」と呼んで毎年八月二

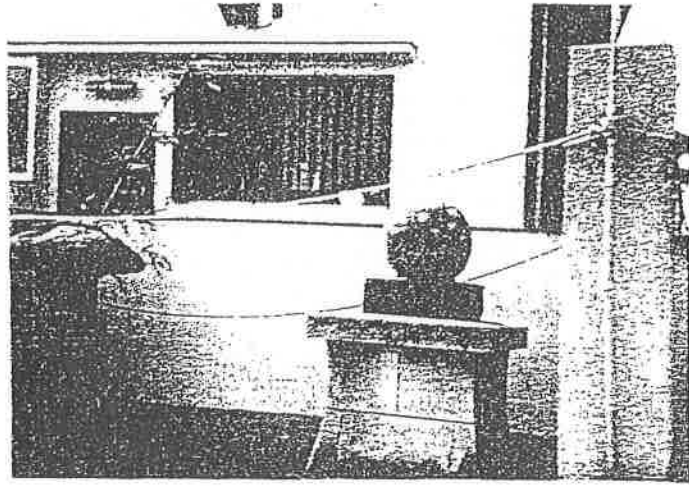
十三日にその祭典を挙行し、現在にまで至っている。現在は、木質で

あるために長い間の風雨にさらされて腐朽し、根元に木質がほんの僅

か残っているに過ぎないので、「楠地藏尊」と刻んだ燈籠を建てて大

木の神の代わりになっている。鳥居の代わりに二本の石柱を建てた。

傍に道祖神（球形）もあるので、狭いながらも神域の様相を示現し
ている。



道祖神 西条 下切

道祖神の裏面には、

大正十五年四月

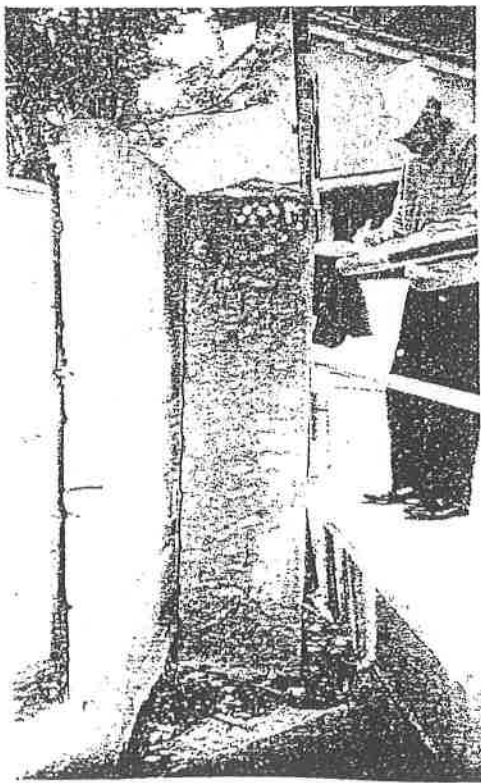
下切中

敷地寄付 高野廣造

と刻まれている。

6 義清神社案内碑

寿楽川が西条の前切と下切に分かれる南角（元小宮山良夫氏の屋敷



義清神社案内碑

の北隅)のところに義清神社の道標が建っている。

前面に 義清社

右側面に 甲斐源氏祖御舊跡

左側面に 従是東二丁入

と刻まれている。みのぶ道の旅人が年々増加して来たので、義清神社の参詣人も多くなり建てられたものだと思うれる。

角柱の幅三十二センチメートル、高さ一メートル三十五センチの堂々たるものである。

7 藤 棚

この店は現在の深沢淳様(西条四三一一番地)の屋敷のところにあったものである。藤棚があつて、それが大きく花房も長く美しかったので「藤棚」と呼ばれるようになったのである。料理屋であつて女中まで置いた当時としては立派な店舗であつた。池もあり鯉も泳ぎ、築庭も綺麗でみのぶ道では有名なところであつた。経営主名執松右衛門氏は西条の名主で村一番の名門であつた。屋敷が広大で北は今の農協まで、東は故秋山富士夫様の屋敷までほぼ正方形であつた。

甲府から約四キロメートル、旅人が一休みしたいようなところにあつたので店も繁昌したのである。そばに雑菓子などを売る店が二軒あつて小さいながら「宿場」の様態をしていたので「西条の宿」と人々は呼んでいた。酒肴の他に団子なども売っていて、求めによれば宿泊もできたのであつた。

明治維新になり名主制度もなくなり、財産も衰微してきたので経営

難となり、全部を売り払つて後裔は他のところに移り住むようになった。その土地は全部長谷川嘉兵衛氏(現長谷川明夫様先代)が買い取り桑畑にした。その中に一つ文庫蔵だけが残った。その蔵と付近の僅かばかりの土地とを三城収治氏が買つて住むようになった。三城氏は秋田県士族で山梨県庁に勤務していた。退官後推されて村長までなされた方であつた。未亡人はそこに住んでいたが、子供が成長して他に出てしまい、自分も亡くなり誰も居なくなつたので再び長谷川嘉兵衛氏に戻つた。今は蔵もなくなり、あと地は昭和バイパスと宅地になつてしまつた。

名執家の当主名執保義氏方には旺盛だつた名主時代の面影を残していて、かつての本屋の屋根瓦が残っているが、それによって本家がいかに壮大なものであつたかが窺われる。その他、代官所から「触」を知らせる「飛脚箱」を初め、陣羽織、刀、古文書、家具、調度品等数多くのものが残されていて、往時を偲ぶがともなるのである。

特に珍しいものとして、「男根」が残っている。往時男女の性器は神秘的なもので神格化する風習があつた。各地に男女の性器を神として祭祀しているところもある。

名執家のものは男根で鉄製のものであるが、子宝に恵まれない婦女子がこれを借り受けて手でさすると子宝に恵まれるということで、その信仰によって近村から借りに来る者が多く、それは近年まで続いたということと霊験あらたかに事実子宝に恵まれた方もあつたということである。

8 大場床屋

西条一区深川屋の前の道を隔て、真向こう、現キッチン・ロアのところに床屋（理髪店）があった。間口一間半奥行二間の小さい田舎床屋であった。床に板も張ってなかっただの土間であった。木製のご粗末な椅子が一つと洗面施設のほか、何の飾り物もないみすばらしい構えであった。顔を拭く手拭いが置いてないので、理髪に行くのにめいめい手拭いを持参しなければならないのであった。現在のように西洋剃刀ではなくて砥石で研ぐ日本剃刀を使っていた。東側に土間より少し高い縁側が設けてあって、お客が待ち合いに将棋をさしていた。将棋盤も足のない板のものであった。お客が将棋に熱中してしまつて順番がきても次の人に譲るといふのんびりした風景であった。しかし、大場床屋は剃刀を研がせば名人芸を持っていた。

この床屋大場某はどこから来た者で、姓を大場といったから大場床屋と人は呼んでいた。

妻も子もなく何の道楽もないので、大場氏は仕事が終わると甲府へ「そば」を食いに行くのが何よりの楽しみであった。当時（大正）、甲府で飲食店として有名なものが「奥村のそば」と「水吉のしる粉」と二つあった。鮎では「魚そう」が有名であった。

奥村そば店は元相生町にあって創業三百五十年を誇る老舗であった。大場氏はその奥村へ行つて、女中が何にしますかと聞けば、

「ざる。」とだけホツリという。

幾つにしますかと聞けば、

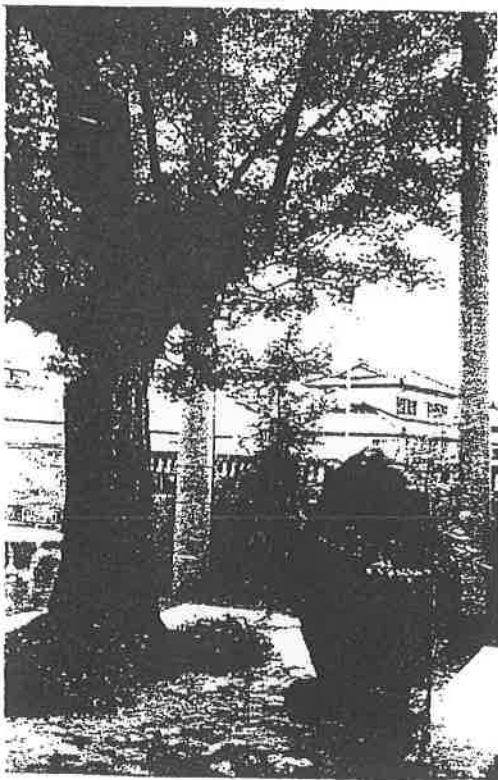
「もういいというまで幾つでも。」という。

村人は大げさに、大場は「ざる」を背の丈まで食ったというほどそばが好きであった。

大場氏のそばの食い方は、茶碗から口、口から胃と一続きであったというほどで、村人は大場はそばを食うのではなくてそばを飲むのだといった。

彼は明治・大正頃の人だったが、何時死んだか村人も知らず一代で終ってしまった。

9 妙源寺案内碑



妙源寺案内碑

この石碑はみのぶ道から西条一区の北へ行く道の三叉路の入口、現在の志村恂直氏の横に建っていたものである。みのぶ道を通る旅人にこの道の北三百メートル位のところに名利妙源寺（日蓮宗）があるという案内のために建てられたものである。道路拡幅のために現在は寺の境内に移されている。

表 南無妙法蓮華経 日地 花押
四十九世

浄光山妙源寺

裏 寛政七乙卯六月

檀方中

願主 仲沢利右衛門
同人内方

世話人 河西嘉平治

十四代 玉祥院日染

元禄文化が旺盛を極め、一面人々が奢侈に流れ、人心も放恣となりなお天明の大飢饉で人々は不安の生活に陥ったので、徳川十一代将軍は松平定信に命じて寛政の大改革をなさしめたのである。所謂寛世の治である。これによって人心も安定し、経済情勢も好転してきたのでみのぶ山参詣の旅人も増加してきたのでこの案内碑を建てられたと思われるのである。

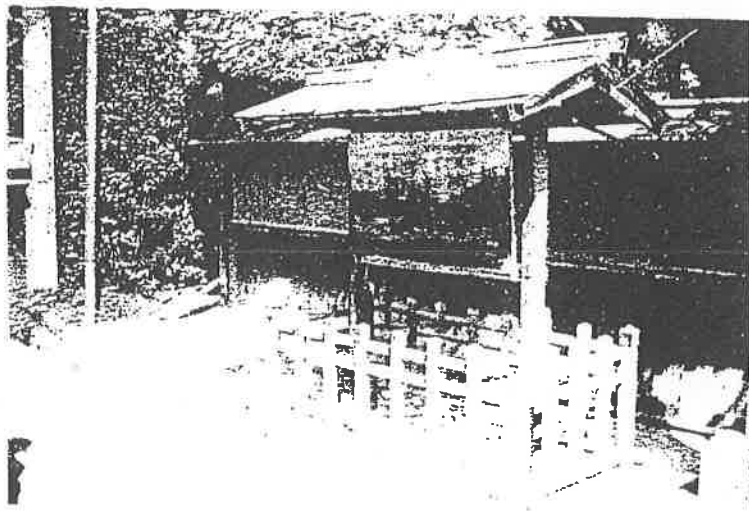
10 ごはんぎょう

ごはんぎょうとは「御判形」と書くべきがよく判らない。

西条ではとにかくただごはんぎょうといっている。みのぶ道が西条へ入り、妙源寺の方へ行く道との交叉点に建っていた。現堀内俊郎氏（西条四二二三）の裏でやゝ広い四つ辻の中央に建てられていた。

高札になっていて、当時の揭示板の役割を果たしていたものである。道路整備のため昭和十年頃取り毀されて今はその面影もない。

殆ど同じ形態をしているものが、北巨摩郡白州町二八三北原兵庫氏（酒の王者七賢、山梨銘醸株式会社）の門前に現存しているので別添の写真を撮らせてもらった。高さも広さもすべて構造が同じようなものであるが、西条のものは外側の木の柵の下に石垣が二段積んであった。



ごはんぎょう

ごはんぎようは官府から治下の村邑に触れ（布告・布令と同じ）を伝達する場所で、官府から飛脚が飛脚箱をかついで走ってきて、村の名主がそれを受け取るために出迎えたところであった。布告の文章を受け取った証文に印を押したからごはんぎようといったのではないかと思われる。名主様はそれを書いて村民に知らせるために中央の板に貼って知らせたのである。布告でなくても名主が住民に知らせたいことがあればこれを利用したことであろう。廢藩置県となり、印刷技術も進み布告は文章で郵送されるようになったのでごはんぎようの役割は終わったのである。

それでも村では片付けなくてそのまま保存しておいたので子供のよい遊び場所となった。子供は棚を横へつたわったり、棚から飛び降りたり屋根へのぼったりして遊んだものである。

11 咳地蔵

義清の墓所、通称、「おこんこん山」の隣に、大正、昭和初期まで、三体のお地蔵さんが、仲よく肩を並べて立っていたそうです。ところが、何時の間にか、二体のお地蔵さんが姿を消してしまつたのです。

地所の所有者は、「あとの一体は必ず守るぞ。」と、自分の家の植木場に移し、現在に至っております。高さ一尺四寸、巾一尺くらいの石に、お地蔵さんをほりこんであります。もう長い年月のため、顔などははっきりしません。それに、由来の文字が刻まれたようすもありません。ある学者の説によると、徳川時代の作品であろうとのこと

です。

昔、西条村の隣り村に、親子四人の百姓がすんでいました。

二人の子供のうち、下の子は、小さいころから風を引きやすく、咳が出はじめるとなかなか止まらず、苦しむ様子は、ひととおりではありませんでした。

「困りもんだ。お医者さんは遠いし……」こんな具合で、両親は途方に暮れました。

そのときです、同じ村に住んでいる或る人が「おこんこんさんにおめいりしてみろしね。あの地蔵さんは、咳についちやあ、ほんとうにご利益があるよ。」と教えてくれ、治ったとき、お礼の仕方までつけ加えてくれたのです。

「藁で作った棧俵に赤飯をのせ、それを供えりやあいんだ。」と、これがお礼の仕方の内容でした。

これを聞いた両親は、夜明けと同時に

お地蔵さんにお詣りし始めました。

一日目、二日目と、「子供の咳が

治りますように……」とお願いを

しつつ、三日目、のお願いを

終えて家に帰ってみると、子供の咳が、

嘘のように止まり、子供は何日ぶりかで笑顔を見せたのでした。

両親は、早速、教えてもらったとおりにお礼をし、自分の家でも、同じような方法で、赤飯を屋根棟に供げ申して、お祝いをしました。

それからというもの、西条村はいうまでもなく、隣村から隣村へとこの噂が広がり、誰いうと無く、咳地蔵と呼ぶようになったという事です。



源義清公の墓所としていつたえられているが、地域では「おこんこん山」と呼んでいます。名前のとおり、昔、この辺りには狐がよく出たそうです。

義清塚は現在、義清神社の社域からは隔たり民家等に囲まれているが「甲斐国志史」にも、「義清社ノ傍ニ奥櫛ノ墳アリ」と記載されており、かつては神社の一角であつたと考えられる。

十三年前に義清神社境内地とともに発掘調査を実施しましたが、塚の構築目的に関連する内部構造が構築に伴う遺物と判断できるものが検出されず、

塚の性格、

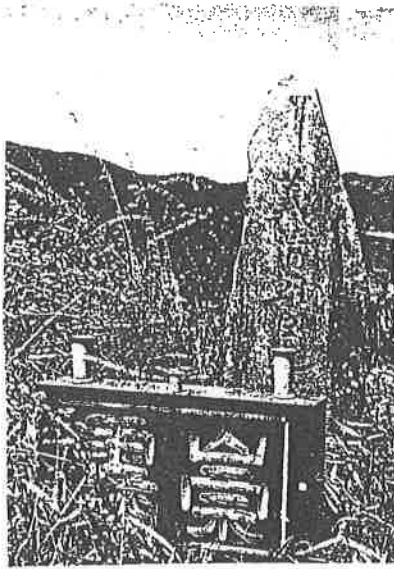
構築年代については

結論が出せず、

義清の墳墓か否かに

ついても

依然として不明である。



甲斐源氏の祖、新羅三郎源義光の三男で「承保二年 生 久安元年 没、一千七十五年〜一千百四十五年」の晩年の館跡で、没すると屋敷跡に社殿をつくり、義清の霊と神を崇めて奉祀し、義清神社を正式の名称とした。

義清神社の祭神の父、源義光公は鎮守府將軍、頼義の三男で、長男八幡太郎義家、次男 賀茂二郎義綱とともに三男 新羅三郎義光として知られている。義光公は三男 義清公の土着として那珂郡武田郷の荒蕪地（現 茨城県）を譲受け居館を築いてから武田冠者と名乗った。

義光公が没すると武田郷周辺の土豪たちが反武田の反乱を興し、これを機に甲斐国市河の庄へ配流となり、今の市川大門町の平塩の岡の「配所」に着いた。

こうして義清公が常陸の武田郷に土着して以来、営々として築き上げた常陸武田の勢力は甲斐に移り、ここに甲斐源氏が興った。

義清公は間もなく市河庄司に任命され、そののち義清公は嫡男清光公とともに逸見郷に移り中央多麻庄若神子に館を構え、七里岩片山に若神子城を築いた。

義清公は逸見若神子に拠するにあたり、甲斐源氏総領 逸見刑部三郎義清と名乗り、嫡男の清光公には逸見冠者 源太清光と名乗らせた。義清公は甲斐入国以来、嫡男清光公と協力して甲斐源氏の基礎を固めた。晩年は再び市河里西条の地に注いで風雅を友としていたが、久

安元年（一千百四十五年）波乱に富んだ生涯を終えた。

享年七十老歳であった。

清光公はじめ歴代の甲斐源氏の一門と地元の住民が隠棲の宅跡に祠廟の工を起こし、義清神社と崇めて以来祭祀を怠らず、五十年ごとの式年には大祭を執行して八百五十有余年後の現在に至っている。

